＜大賞＞

ETV 特集「ルポ 死亡退院 精神医療・闇の実態」
NHK ディレクター 青山浩平さん・持丸彰子さん

准看護師A：すいませんじゃねえよ！日本語わかんねえのか？オラ！
看護師B：また泣くのか？泣いたらゲンコツで叩くぞ、お前！
しきりに謝る患者と居丈高な職員。。。

右のような映像と声が、日本の精神病院の現実を露わにし、視聴者に衝撃を与えました。

取材班は、1498 人 10 年分の患者リストを入手し、それをもとにした緻密な分析を展開しました。たとえば、1498 人の 78％にあたる 1174 人が死亡退院であること、カルテと診療内容を照合すると、不必要・不適切な診療が行われていたこと。身体拘束が日常的におこなわれているにもかかわらず、東京都の監査では「A」と評価されていること……。

1960 年代、日本の厚生省は国際常識と真逆な政策を展開しました。精神病院建設奨励策です。精神病院はどこに建ててもよい、一般病院に比べて人手は少なくてよい、低利で融資する、という政策です。その結果、日本の精神科ベッド数は世界の先進諸国の 37％を占めることになりました。不必要で、長い入院期間や虐待などの人権侵害も起こり、国連から勧告を受け続けてきました。しかし、一般医療と異なる密接性に阻まれ、明るみにでない日々がつづいていました。1 年以上の取り組みで、ここに風穴をあけた粘り強さに、ライバルのテレビ局のジャーナリストからも推薦書が寄せられ、選考委員一致で大賞と決まりました。

＜大賞＞

「ゆりかご 15 年 いのちの場所」と一連の報道
熊本日日新聞社「ゆりかご 15 年」取材班

予期せぬ妊娠に悩む少女、一人で出産せざるをえなかった困窮状態の女性。自身で育てられない子どもを、匿名でも預かる「こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」が開設から15年を迎えました。「ゆりかご」は現代社会のさまざまな問題を映し出す鏡、という思いから、熊日の記者は、バトンタッチしながら、この問題を息長く追いかけてきました。連載は、「ゆりかご」開設の日に預けられ高校卒業と同時に自身の身の上を公表した青年の日々から始まっています。さらに「ゆりかご」に預けた母、「ゆりかご」の子を育てている養父母の声も記事にしています。記者たちが、丁寧に人間関係を築いてきたたまものといえるでしょう。

新しい取り組みも始まっています。病院のスタッフだけに身元を明かして出産する「内密出産」です。国もガイドラインを公表。他の医療機関にも広がる可能性がでてきました。匿名出産の歴史が長いフランスや、「ゆりかご」のモデルになったドイツにも取材をひろげたこの企画は、「県を超えた影響力をもつ、示唆に富む

企画」と大賞に決まりました。

＜優秀賞＞

『ツベルクリン騒動　明治日本の医と情報』

月澤美代子さん

結核菌を発見したコッホは、当時、もっとも注目されていた医学者でした。そのコッホが、1890 年、世界各国から 5000 人以上が集まったベルリンでの国際医学会の特別講演で、「ある物質で処置すると、モルモットは結核に感染しても治るようだ」と報告したのがはじまりでした。いまでは結核感染の「判定薬」として知られるツベルクリンは、「治療薬」として過剰な期待を集め、人体に対する結果を含んだ論文発表の後、欧米各地の医療施設で入院患者に使われることになりました。

しかし、コッホの主張する治療効果は追認できず、死者まで出て、急速に失望感が広がっていきました。

この「ツベルクリン騒動」を日本で煽ったのは、新聞や知識に乏しい開業医といわれてきましたが、月澤さんは、学術論文だけでなく、官報、商業誌、一般新聞、海外の文献、留学生からの私信にいたるまで、厖大な資料を読み解き「史実の修復作業」をなし遂げました。

そして、当時内務省衛生局長だった長与専斎が導入し、時事新報主幹の福沢諭吉が広めたこともつきとめました。

月澤さんは、特定の治療法に固執する権威ある医師に対して同僚の医師たちが批判をためらう「日本の医療界の風土」が誕生した原点に、この「ツベルクリン騒動」があったとしています。

また、内務省の監督下で行われた臨床実験に関する内部文書で「死亡」の数が抹消され、臨床実験中の死者が公的記録として残されなかったことも指摘しています。

500 ページ余、3 センチの厚さ、7000 円ほどのこの本を協会賞の対象にすべきかどうか議論が分かれましたが、「新型ウイルス感染症について、政治家が都合のよいように発信するなど問題は続いている」「権威への盲信、迎合、追随が、数多くの捏造や、隠蔽をうんできた過程を知ることは、医学ジャーナリズムにとっても貴重」という強い意見が出て、優秀賞に決まりました。

〈選考委員長からのご報告〉

最後となりましたが、選考にかかわった医学ジャーナリスト協会メンバーが注目した Web サイトの応募があったことをご報告します。「HPVワクチンのほんとうのことを知ってほしい実行委員会」という、手作り感のあふれる素朴な Web サイトです。 https://kiyonohako.jimdofree.com/

「知られていない副反応や後遺症があることを知った上で、接種してほしい」と、若い女性たちが立ち上げたサイトです。大手メディアが、子宮頸がんワクチンの後遺症を積極的には、とりあげない中、勇気を出して立ち上がり、インターネットという新しいメディアで発信をつづけている勇気を讃えたい」「従来の協会賞の選考基準からは若干はずれているが、オリジナリティ、社会的インパクトを評価したい」などという声が高く、ここでご紹介させていただきます。